
東方真不死鳥伝

るーか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方真不死鳥伝

【Zマーク】

N1905N

【作者名】

るーか

【あらすじ】

青年は出会い。

自分の運命を変える少女と

この小説はオリ主、最強系、原作崩壊など色々な要素が含まれます。
それが嫌な方はブラウザバックをお願いします。

代序話　前書き（前書きや）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はブラウザバックを推奨します。

昔々ある所に何の変哲も無い村がありました。

その村から少し離れた所に、不知火灰しらぬい かいと言つ青年が住んでいました。

齡ねいは十九前後あかと言つたところでしょうか、その青年の髪は黒、目は朱あかと言つた、少し変わつた青年が住んでいました。

不知火ちからはある能力ちからを持つていました。

そのため、村から離れた場所に住み、村に襲つてくる妖怪を倒していました。

彼が村人に対するせめてもの償めぐらいでした。

彼が生まれる時に彼の母親は体の中から炎が吹き出し、見るも無残に燃え尽きました。

その母親が燃えた灰の上に不知火灰は傷一つ無い様子で座つていました。

母親を殺した我が子を殺そうと父親は幼い不知火の首を絞めて殺そうとしました。

ですがまた、父親も母親と同じように燃え尽きてしまつたのです。

その様子を見ていた祖母は恐怖し、『化け物だ』と村中に伝えました。

そして祖母の話を聞いた村人は不知火灰を殺そうとしました。ですがやはり、父親と母親と同じように燃え尽きてしまいました。

そんな時一人の術者が村を訪れました。

其の人物はセイメイと名乗りました。

セイメイは村人に頼まれ、不知火を見に行きました。

不知火の家に入つたセイメイは絶句しました。

赤子一人だけ置いて家には誰もいらず、それに加えて床には大量の灰が在つたからです。

そしてその赤子は一人で灰で遊んでいました。

固まつっていたセイメイですが、その赤子の内包する靈力を見て先ほどよりも絶句しました。

術者の中でかなりの靈力を持つていたセイメイですらその赤子の一割にも見たなかつたからです。

セイメイは慌てて、封印術をかけました。

ですが、セイメイは封印術をかけ終わり、へたり込んでしまいました。

赤子の力を封印するだけで、セイメイは自分の持つている靈力全て捧げてしまつたからです。

そしてその赤子はセイメイの方へと這つて着ました。

嬉しそうに、楽しそうに笑いながら。

其の姿を見てセイメイは思いました。

私が育てよう。

そう決心したセイメイは直ぐに村人に赤子と私は住むと言つて、村はずれにある古びた小屋を借り、赤子に灰かいと名をつけ一人で暮らしました。

セイメイが死にました。

十年後

過労だつたのです。

いつも一人で妖怪退治をし、家事をし、村人の治療をし、働きすぎでした。

セイメイが死んでからが大変でした。

セイメイがいた頃ならまだ、灰は普通の子のように接しられていましたが、セイメイが死んだら、直ぐに『化け物』と呼ばされました。そして、石を投げられました、足で蹴られました、家を荒らされました。

ですが耐えました、自分のやつた罪を知っているからです。

それから彼は体を鍛え始めました、村の人たちを護るために、自分がやつた罪は赦されないけれど、それでも償いたいから。

そうして何年か過ぎ、灰は十九になりました。

妖怪と戦い続けている彼は出会いました。

これから彼の運命を変えるであろう少女に

代令話 #話（後書き）

真不死鳥に会ひうでしようか。

零はガラツと変えて見ました。

どうぞこれからもよろしくお願いします。

感想、誤字等あつまいたらどうぞどんどんください。

代序話 始まりの日（前書き）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はプラウザバックを推奨します。

代壹話 始まつ日の日

リンリンと鈴の音が灰の頭に響いた。

その鈴の音はセイメイが残した結界であった。

結界は村全体を覆つており、その中に妖怪、神などが入ると知らせる感知用結界であった。

「さて、いくか・・・」

オレは赤い和服の上に黒い羽織を羽織つて結界が示した場所にゆっくりと行った。

反応は弱い、相手は雑魚と考えてます相違ないだろつ。

そう思い、今日の昼飯の献立を考えていると反応が在つた場所についたようだった。

「ここには・・・」

其処にいたのは、まだ幼く見える少女であった。

驚いたのは其処ではない、その少女は妖怪ではなく神の一種であつたからであつた。

尚且つその神は消えかかっているようであつた。

「おい、其処に倒れている神様。」

反応がないな・・・

全く、何だつて言つんだよ。

雑魚妖怪だと思つて見て見れば消えかけている神様だじよ。

はあと一つため息を漏らすと灰はその神様を背負つた。

「はあ・・・はあ・・・

私はもう駄目なのでしょうか・・・

まだまだ、やり残した事は沢山あると言ひの。たのひう。

私と言う地蔵が人々に忘れられて何年でしょう・・・
最後に来てくれたのは、あのセイメイと言ひう女性でしたね。
懐かしいです。

それに、セイメイには息子がいるみたいでしたね。
私に手を合わせて息子の幸せを願うんですから・・・

「もう・・・駄目・・・ですね・・・」

限界だった。

忘れ去られた幻想は、消え行くのみである。

もつと後の時代ならば、受け皿の土地があるかも知れないが、今は
まだ無い。

何故なら、世界には幻想が溢れているからだ。

そこらには妖怪がいるし、ヒトの中でも特異な才能を持つた者もいる。

そんな世界に忘れ去られたモノの受け皿があるのだろうか。

答えは否だつた。

取り合えず、布団で寝かせたわけだが、どうすればいいんだろうか。
相手は神で消えかかっている。

・・・わからん。

「こんなとき、セイメイがいればな・・・」

いない者を思つても仕方が無い。
そう割り切ると灰は寝かせている部屋に向かつた。

ガラツと戸を開けると布団の中で寝ていた神様は起き上がっていた。
先ほどよりも顔色は回復した様だったが、まだまだ本調子とは呼べ
なさそうであった。

「旦、覚めたのか。」

「はい。これは貴方が?」

「まあな、さすがに倒れてる女の子は見捨てる事は無理だつて、た
とえそれが神様でもな。」

「なー?」

少女は心底驚いたような表情をしたが、直ぐに冷静な表情に戻った。
「そう・・・ですか。有難うございました。見ず知らずの私を助けて
いただいて。」

「いやいや、気にしないでくれよ、オレの皿口満足だしさ。」

「そんなわけには行きません! 恩を受けたならば恩で返せなければ
!」

「そ、そつか・・・」

少女の激しい剣幕に少々たじろいでしまった灰だった。

「まあ、家には何日でもこていいくからな。」

「いえ、迷惑になりますから、直ぐにでも・・・ッ」

少女はそう言って立ちあがめましたが、やはり回復していないの
か、体が思うように動いてなかつた。

這つてでも出て行きそうな雰囲気を感じた灰は即座に切り出した。

「いてくれた方が助かるんだ、最近誰とも話して無くてさ。話し相
手がほしかったんだよ。」

「本当に良いのですか?」

「うちからお願ひするよ、オレは灰だ。苗字はまだ決めてない。」

「私は四季映姫です。これからお世話になります。」

「映姫が、これからよろしく。」

「よろしくお願ひします灰。」

「じゃあ、なんか用があつたら言つてくれ。それと風呂が沸いてるから入つてくれ。」

風呂場はここを右に曲がった直ぐにあるからな。と灰はそう残して映姫がいる部屋を出て行つた。

「不思議な人ですね。」

そしてどことなくセイメイに似てゐる気がしますね。

代言話 始まりの日（後書き）

無印と眞の違う点を紹介します。

灰の弱体化があります。

具体的なのは本編で。

映姫と一緒に旅に、育ての親がセイメイと書う女性と呼びついひうです。

後は、そうですね、まだきまつてない感じですね。

感想有難うございました。

DKさん

零話は過去話でしたので童話風にして見ました。

心情の描写ですか、頑張って増やそうと思つてているんですが、やはり説明文の方が多くなってしまいますね、頑張ります！

応援よろしくお願ひします！

ではまた次回

感想など待つてます。

代戦話 夏、燃える太陽（前書き）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はプラウザバックを推奨します。

代武話 夏、燃える太陽

映姫と出会いてから季節は流れ今は夏である。それも今年はいつもよりも暑い、そのためオレは夏でも羽織つていた羽織を脱ぐ羽目になつたんだ。

「全く、暑い暑すぎる・・・」

「灰はそればかりですね。全く。」

映姫はそう言いながら汗一つ搔かずに部屋の掃除をしている。縁側で死んだように横になつているオレとは全く違うな。

「だつて暑いもんは暑いだろ?よ。映姫は暑くないのか?」

「私ですか、私は暑くないです。」

「へえ、なんか秘訣とかあるのか?」

「そうですね。」

そう言つと映姫は掃除の手を止めて少し考えてつるようだつた。

「ん・・・暑いと思わなければ暑くないんですよ。」

「なんて根性論・・・」

むりやくひやだな。と思しながらオレは立ち上がった。

「あれ、灰どこのいくんですか？」

「ああ、ちゅうとな。暑さ対策にでもつてね。」

オレはそのまま家を後にした。

「灰は行つてしましましたね。」

それにしても暑い。

灰には暑いと思わなければと言いましたが、本当は暑いです。

「お風呂にでも入りましょうか。」

顔は全く汗を搔いていなくとも服のしたは汗でぐっしょりと濡れていった。

暑い暑いこと言いながら映姫は風呂場へと向かっていった。

「灰が作つたこのお風呂は本当に凄いですね。」

この時代風呂を行つた物は無く、体を拭くか湯をかけて布で拭く程

度だつたのだが。

ある日灰は湯を張つたところに浸かれば気持ちが良いんじやないか
と思い、湯船を作つたのだ。

檜の木を大人一人入れる位にくりぬき、そして底の木の中に温度を
上げる簡易符を貼り風呂としたのであった。

「ああ、本当に気持ち良いです。」

灰は本当に良い人ですね。

と映姫は考えふふつと笑つていた。

「さて、映姫には暑さ対策とかいつたけど・・・」

オレの前には数百の獣のような妖獸・・・いや化物がいたのだ。
姿は様々、狗の様であつたり狐の様であつたりと多種多様である。
だが一匹一匹は雑魚妖怪よりも妖力が低いそして言葉ではなく呻き
声を出しているから頭もよくないのである、だが妖怪の一種である
がために力と速度はありえないほどである。それに加えて、数百
と言う数の暴力である。

灰がもし妖怪だつたなら数百と言つ数を捕食し自身の力にしただろ
う。

灰がもし神様だつたら腕の一瞬の内に化物は灰になつただろう。

灰がもし悪魔だつたら腕の一振で全てを消せたであろう。

だが灰は人間である。

少し特別な力（程度の能力）を持つただけの人間であつた。故に、死ぬ事は無くとも傷を大量に負うことは必死であつた。

「・・・やるか。」

映姫に気取られないようにと愛刀である刀を持つてきていなかつたため、通常よりも灰は弱体していだ。

「火炎太陽、我滾々燃」

その呪^{まじな}自体に意味は無く、ただの自己暗示であつた。その暗示により灰は自分の力を發揮できるのであつた。と言つても灰の能力の派生な技な分けであるが。

「さあ燃え尽きろ。」

化物の前列にいた数体が体の内から炎を吹き出して燃え尽きた。化物共は一度怯んだようだが、直ぐに飛びかかってきた。

「一気に飛びかかるなよ・・・なッ！」

何時の間にか手に持つていた炎剣で飛びかかってきた化物を切り裂いた。

切り裂かれたモノは傷跡から発火し燃えていった。

だが、一つを切れば二つから切られ、三つを切れば四つから切られ

の酷く灰に不利な戦いであった。

「がツ・・・クソが！」

炎剣をもつ一つ生み出し双剣とし、さながら乱舞のように振るつて行つた。

どれほどだろうか、もう既に日は沈みかけている。
その戦場には灰一人しか立つていなかつた。
姿は既に満身創痍であり、死人同然であつた。

「・・・やつぱり人じや、限界があるのか。」

だが人外に足を落としてはいけない。
そうセイメイと約束したのだから。

そして灰が最後に思い絵がいたのは、緑の髪をして少し説教くさい少女の顔だつた。

代戦話 夏、燃える太陽（後書き）

更新は週に一回程度になると思います。

最近は色々なゲームに手を出したり遊戯王始めたりと色々しています
からw
まあようは遊んでるんですけどね。

感想有難うございました。

D君さん 自然な感じになつてましたか良かったです。
風景描写ですかなるほど。頑張ってみます。

ではまた次回

感想、修正など待つてます

代参話 悲しみ（前書き）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はプラウザバックを推奨します。

代参話 悲しみ

日は完全に沈み、村の皆は夕飯でも取っているであろう時間だった。だが村はずれにある小さな家には少女一人しかいなかつた。いつもならば青年と二人談笑しながら夕食をとつていてると言ひのひ。

「で、灰は一体何をしているのでしょうか。」

「まったく仕方ないです。」

と言いながら、映姫は家を後にした。

一人で夜道を歩くと言つのは危ない。
そう、この幻想が溢れるこの時代は妖や靈など多く存在するからである。

だが映姫とて神の一柱であつた。

襲いかかる理性がない妖を瞬時に倒して進んで行く。

「全く、どれだけ血の氣が多いのですか・・・殺さずと言つのも大変なのですよ?」

襲いかかる妖を次々と倒していくと、一箇所だけ酷く沢山の妖が集まっているところがあった。

その場所は何かを中心にして、燃えたような妖の黒焦げになつた死体が数百あつた。

「何だといふんで……す……か！？」

映姫は見てしまった、中心にある何かを、それは灰であった。何時も自分に笑いかけてくれた灰であった。

灰のその姿は食い荒らされていた。

腹には大きな穴が開いており、右腕は無く、左足も膝から下がない。その死体に群がる妖を見た映姫は理性が一瞬にして吹き飛んだ。

「アアアアアアアアアアアアアア」

悲鳴のような声を上げながら灰の死体に群がる妖共に襲いかかつて行つた。

目からは大量の涙を流しながら、喉からは悲痛な叫びを上げながら。幾千幾億もの神力で出来た弾幕を打ち出した。

それを掻い潜つた妖には映姫自身が手をして行つた。

死と言う判決を。

「ああ、灰……」

灰の死体に縋りながら映姫は涙を流す。だがその声に答える者はいなかつた。

「帰つて着て下さいよ灰イイイイイイイイイイ」

そこは夢のようだった。

天にある灼熱の炎。

一面に広がる灰の山。

鎮のよろなもので雁字搦めにされている自分

「・・・」

声が出なかつた何がと発音したのにその声が出ていなかつた。
まるで声帯が消えうせてしまつたかのよつこ。

「'ゴフシ'

口の中に鉄の味が広がつた。

それは吐血であつた。

それに体が軽かつたまるで下半身が無いかのよつこ。

右目は何も見えなかつた。

何なんだよ。

と心の中で悪態を突く。

だが現状は何も変わらない。

何故ここにいるのかと。

ここは何故か無限と言つ時間が流れているかの用に時間の経過が遅く感じられた。

そんな中、右目の闇の中に文字が浮かんだ。

↙自・・・思に従・・・らば鎖・・・ちる↙

所々が掠れて読めない文字であった。

これは何なのかと思考を続ける。

分からぬ。

分からなかつた、何もかもそれよりも何かを考える事自体がもういやになつて来ているらしかつた。

そして唐突に思い出出してしまつた。

自分が死んでしまつた事を。

それを思い出してから直ぐに、この無限とも呼べる時間の世界は壊れだした。

天にある炎は消え、地にある灰は消えていった。

世界の終わり。

引き伸ばされていた死が直ぐ其処にあつた。

オレは死ぬのだと諦めてしまつた。

『帰つて着て下さいよ、灰イイイイイイイイイイイ』

声が響いた。

自分以外いなかつた世界に一人の少女の声が響いた。

諦めていたオレは氣付いた。

オレが死んだら映姫は一人ぼっちになると。

そんなど嫌だつたのは嫌だつた。

何で嫌だつたのかは分からぬ。

だけど、今みたに映姫の泣いている声や顔を見たくなかつた。

「死にたくない、映姫と生きていたい！……！」

出ないはずの声をだした。

ただ映姫と生きていたいから。

パシン

と言づ音が聞こえた。

ボロボロの体を縛つていた鎖が砕けたのであつた。
体が動く、其の事だけを確認すると走り出した。

懸命に全力で映姫に会うために。

「オレは絶対にしなねえ！……！」

直ぐに口に血が溜まつたそれを吐き出しもせずに飲み込み。
走り続けた。

穴が開いた腹から臓物が落ちた。
そんなものは気にせず走つた。

ただ懸命に生に縋りつきながら。
灰の大地を走つた。

目の前に白い光が見えた。

「オレは……！」

その白い光に飛び込みながら叫んだ。

「生きる……！」

代参話 悲しみ（後書き）

最近また風邪引きました。
咳が酷いです。

ではまた次回

感想など待つてます。

感想は作者の原動力になります

代序話 覚醒（前書き）

この小説は独自解釈や独自設定、キャラ崩壊等がありますので、嫌な方はプラウザバックを推奨します。

私は驚いていた。
目の前にあつた灰の死体がどんどんと灰になつて行つているのだから。

「か、灰・・・？何ですか、これは！」

直ぐに灰の体は完全に灰になつてしまつていた。

「・・・！？」

灰であつた灰が突然旋風のように回り始めたのだから。
そしてその渦は段々と人の体のように集まつていつた。

「泣かせて、悪かつたな。映姫」

そこには灰が立つていた。

「い、生きているんですか・・・？灰。」

「オレは一回死んださ、でも見つけたんだ。」

そこで一度言葉を区切つた灰は、少し間を空けてから続けた。

「オレの能力『死んでも灰になつて蘇る程度の能力』をね。」

「では本当に灰なのですね！」

私は泣いていた。

大泣きだつたそんな私を抱きしめながら灰はすまなかつたと連呼していた。

「本当に死んでしまつたと思つたのですよー。」

今映姫は嬉しそうに頬を染めながらオレに説教をしてくる。オレもこの説教は少し嬉しかつた。

一度死んだのだから、死んだと自覚したしあつ駄目だとも思つた。だけどオレは能力で生き返つた。
たぶんこれはオレ本当の気持ちのお陰なんだろう。

「聞いているのですか！」

「ああ、聞いてるつて全く。」

でもまだこの気持ちを伝えれない、別にオレが言つのが恥ずかしいとかじやなくてだ。

色々な問題がある、普通に寿命だ。

オレは死んでも生き返るが年をとらない訳じやないと慰ひつ。どうにかしたい。

それとこっちの方が一番大切な。

オレがこの村に近くさねばならない。

そうこれはオレの戒めなのだ、だから破れないし破らない。

「映姫オレは　」

「はい、どうしました？ 灰。」

「IJの村を護りたい、未来永劫ずっと無限に。」

「・・・」

「ああ、分かってるや、無理な事くらい、未来永劫なんて無限なんてないって事はな。でも護りたいんだ！ オレは村に酷い事をした、だからオレは村を護り続けたいんだッ！」

「・・・そうですか、では止めませんよむしろ手伝わせてください！」

そういつた映姫の顔は笑顔だった、その顔を見たオレも自然と笑顔になつた。

「ああ、よろしく頼む。」

代肆話 覚醒（後書き）

更新多大に遅れてすいませんでした。
もうもの事情は活動報告に書きましたのでよかつたら。

ではまた次回。

感想等お待ちしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1905z/>

東方真不死鳥伝

2012年1月10日18時54分発行